

公開本数・公開作品

公開本数の推移

映画館における映画の公開本数は、1955年以降2004年までは、年による多少の増減はあるものの、550-700本を推移してきた。2005年以降、(微減の年はあるが)毎年増え続け、2013年に日本映画、外国映画とも500本以上となって公開本数が1000本を越えた。これ以降、公開本数が1000本を下回ることなく、2019年には、日本映画689本、外国映画589本、合計1278本が公開されている。10年前、2010年の716本に比べると562本も増えている。日本映画と外国映画の公開本数のシェアは53.9%:46.1%で、前年に比べると日本映画の割合が2%高くなっている。

公開作品本数の増加に伴い、1作品の公開期間は短くなり、映画館の上映本数が急増し、目まぐるしく上映作品・時間が組み替えられるようになった。かつて、映画館の上映スケジュールを掲載していた月刊、あるいは隔週刊の情報誌の多くが姿を消し、現在では、インターネットで上映スケジュールを確認するのが一般的になっており、チケットのネット購入はシネコンのみならず、ミニシアターや既存興行館にも広がっている。

1作品当たりの観客数の平均値は2011年まで

fig.07

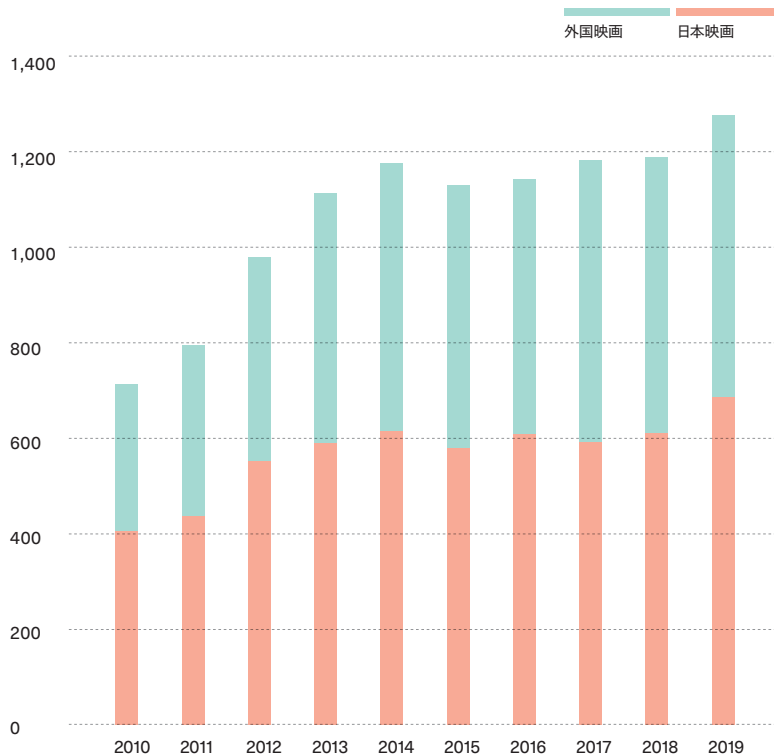
1作品当たりの観客数の推移 (2010-2019)

	観客数(千人)	公開本数	1作品当たり観客数
2010	174,358	716	243,517
2011	144,726	799	181,134
2012	155,159	983	157,842
2013	155,888	1,117	139,560
2014	161,116	1,184	136,078
2015	166,630	1,136	146,681
2016	180,189	1,149	156,822
2017	174,483	1,187	146,995
2018	169,210	1,192	141,955
2019	194,910	1,278	152,512

「日本映画産業統計」(日本映画製作者連盟)参照

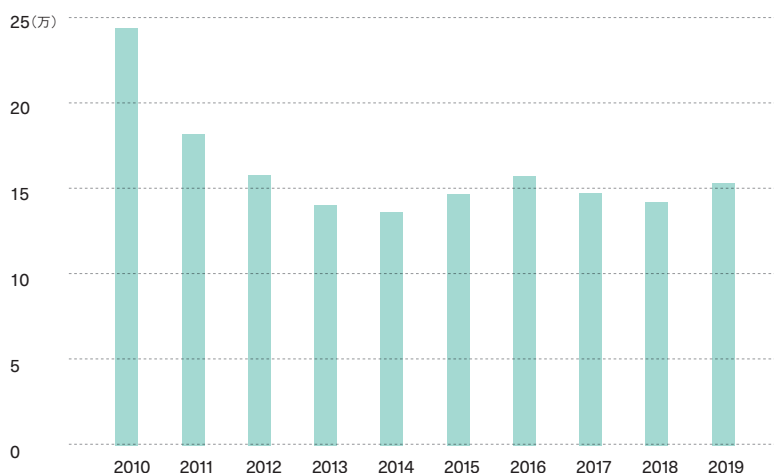
fig.06

公開本数の推移 (2010-2019)



	日本映画	外国映画	合計	シェア	
				日本映画	外国映画
2010	408	308	716	57.0%	43.0%
2011	441	358	799	55.2%	44.8%
2012	554	429	983	56.4%	43.6%
2013	591	526	1,117	52.9%	47.1%
2014	615	569	1,184	51.9%	48.1%
2015	581	555	1,136	51.1%	48.9%
2016	610	539	1,149	53.1%	46.9%
2017	594	593	1,187	50.0%	50.0%
2018	613	579	1,192	51.4%	48.6%
2019	689	589	1,278	53.9%	46.1%

「日本映画産業統計」(日本映画製作者連盟)参照



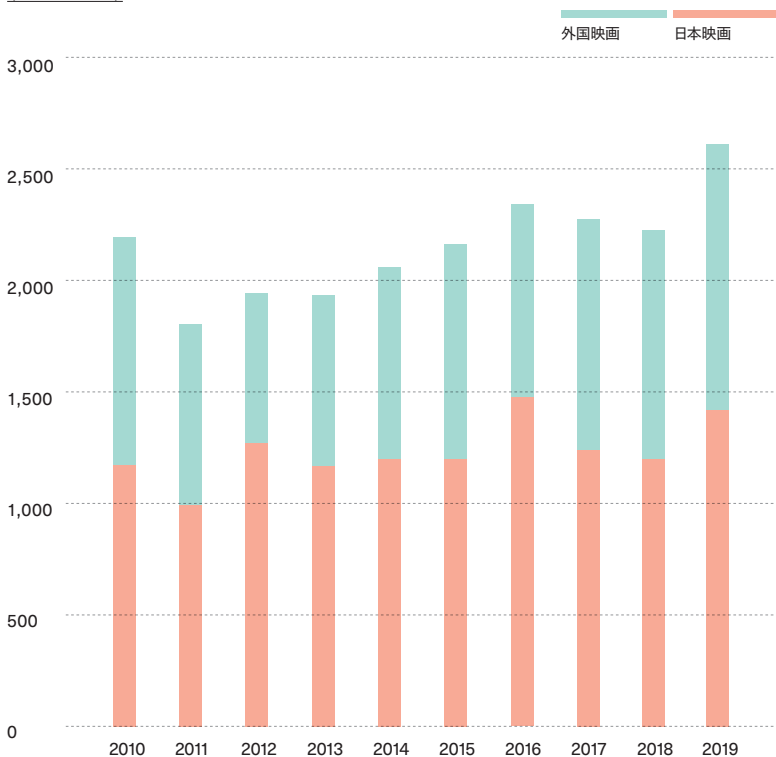
は18-24万人であったが、観客数に大きな変化がない中で公開本数の増加が続いているため、2012年以降は14-16万人で推移している。2019年は観客数が大幅に増え、1作品当たり観客数は15万2512人と、前年の14万1955人を大きく上回っている。→ [fig.06,07](#)

興行収入の推移

2019年の興行収入は、日本映画が1421億9200万円(前年比201億6300万円増)、洋画が1189億8800万円(前年比185億600万円増)、合計2611億8000万円で、前年に比べ386億6900万円、17.4%も増えている。興行収入上位4作品『天気の子』(140.6億)、『アナと雪の女王2』(127.9億)、『アラジン』(121.6億)、『トイストーリー4』(100.9億)が100億を越える興収を記録した。

2018年は興収が10億円を越える作品が日本映画31本、外国映画23本であったが、2019年は日本映画は40本と前年を大きく上回り、外国映画も25本と前年を越えている。2018年には『カメラを止めるな!』『日日は好日』あるいは『ポヘミアン・ラブソディ』など、ある意味で予想外の大ヒット作品が見られたが、2019年は、「名探偵コナン」や「ドラえもん」「ワンピース」といった人気アニメーションや、「アナと雪の女王」「トイストーリー」「アベンジャーズ」「スパイダーマン」などの人気シリーズをはじめ、日本映画、外国映画とも入るべき作品にきちんと集客ができ、中規模公開の作品も幅広く観客を集めることができたことが好調な集客に繋がっている。→ [fig.08](#)

fig.08
興行収入の推移
(2010-2019)



	日本映画	外国映画	合計(億円)	シェア	
				日本映画	外国映画
2010	1,182.17	1,025.21	2,207.37	53.6%	46.4%
2011	995.31	816.66	1,811.97	54.9%	45.1%
2012	1,281.81	670.09	1,951.90	65.7%	34.3%
2013	1,176.85	765.52	1,942.37	60.6%	39.4%
2014	1,207.15	863.19	2,070.34	58.3%	41.7%
2015	1,203.67	967.52	2,171.19	55.4%	44.6%
2016	1,486.08	869.00	2,355.08	63.1%	36.9%
2017	1,254.83	1,030.89	2,285.72	54.9%	45.1%
2018	1,220.29	1,004.82	2,225.11	54.8%	45.2%
2019	1,421.92	1,189.88	2,611.80	54.4%	45.6%

「日本映画産業統計」(日本映画製作者連盟) 参照

公開規模

——
 コミュニティシネマセンターでもインターネットに掲載された情報を元に「公開作品」リストを作成しており、2019年は日本映画650本、外国映画641本、合計1291本という数値を得ている。映連発表の数値とは多少の齟齬があるが、こちらで得たデータを元に公開作品の中味を見ている。

公開規模

「300館以上」の映画館で公開されたのは、日本映画43本、外国映画32本である。この数は2018年と大きな違いはない。日本映画では「ドラえもん」や「名探偵コナン」「クレヨンしんちゃん」「ワンピース」等のアニメシリーズや、『天気の子』『男はつらいよ お帰り寅さん』『翔んで埼玉』『空母いぶき』、『記憶にございません!』等々、外国映画では、『アナと雪の女王2』『キャプテン・マーベル』『スターウォーズ スカイウォーカーの夜明け』『リメンバー・ミー』『アラジン』『トイストーリー4』といった「大作」「話題作」が並ぶ。これらの作品はシネコンでしか公開されていない。

「150館以上」で公開された日本映画、外国映画も概ねシネコンのみでの上映となっている。2019

年は『この世界の(さらにいくつもの)片隅に』(2019|片瀬須直監督)が、東京でシネコンとミニシアターで同時公開され、その後、多くのミニシアター・既存興行館でも上映されている。外国映画では、『グリーンブック』『映画 ひつじのショーン UFOフィーバー』がミニシアターでも上映されている。

「50-149館で公開された」映画は、外国映画は75本で2018年とほとんど変化はないが、70-149館に絞ると32本から42本と大幅に増えている。50-149館で公開された日本映画は81本から121本に大幅に増加している。公開規模が50-149館クラスの作品は、地域によってシネコンで公開されることもあれば、ミニシアター/既存興行館で公開されることもある。また、映画館のデジタル化によって、現在では「順次公開」の必然性は薄れているが、このクラスの作品の多くが「全国一斉公開」ではなく、順次公開されており、都内ではシネコンや比較的大きなミニシアターで公開されたアート系作品が、ロードショー公開終了後にミニシアターで二番目に上映されることも増えている。

この公開規模の作品でミニシアターでも上映された作品には、外国映画では『イエスタデイ』(2019|ダニー・ボイル)『ブラック・クラウンズマン』(2018|スパイク・リー)『女王陛下のお気に入り』(2018|ヨルゴス・ランティモス)『ふ

たりの女王 メアリーとエリザベス』(2018|ジョージ・ルーク)『永遠の門 ゴッホの見た未来』(2018|ジュリアン・シュナーベル)『ある少年の告白』(2018|ジョエル・エドガートン)『ヴィクトリア女王 最期の秘密』(2017|ステイヴン・フリアーズ)『天才作家の妻 40年目の真実』(2018|ビョルン・ランゲ)といったいわゆる“インディペンデント系”“アート系”と称される作品の中でも大きめの作品が並ぶ。日本映画では『新聞記者』(2019|藤井道人)『愛がなんだ』(2019|今泉力哉)『ヒキタさんご懐妊ですよ』(2019|細川徹)『初恋 お父さん、チビがいなくなりました』(2019|小林聖太郎)『そらのレストラン』(2018|深川栄洋)『半世界』(2019|阪本順治)『凧待ち』(2019|白石和彌)『宮本から君へ』(2019|真利子哲也)といった話題作が並んでいる。

50-69館規模公開の作品で、ミニシアターのみで上映された『家族を想うとき』(2019|ケン・ローチ)『主戦場』(2019|ミキ・デザキ)『僕たちは希望という名の列車に乗った』(2018|ラース・クラウメ)といった作品も多くの観客を集めている。

このような50-149館規模の作品が増えたことも、2019年の興行の好調の背景にあると考えられる。このクラスの作品を中心にプログラムを組むことができたミニシアターや既存興行館の2019年の集客は比較的好調だったのではないかと

fig.09

2019年に映画館で公開された作品の公開規模

日本映画					
公開館数	本数		シネコンのみ	シネコン+ミニシアター	ミニシアターのみ
300館以上	43	7%	43	0	0
150-299館	39	7%	38	1	0
101-149館	47	8%	28	19	0
70-99館	32	6%	16	14	2
50-69館	42	7%	22	16	4
30-49館	55	10%	28	15	12
10-29館	125	22%	42	21	62
9館以下	194	34%	13	18	207
以上小計	577	100%			
その他(特集での1回上映など)	73				
合計	650		230	104	287
外国映画					
公開館数	本数		シネコンのみ	シネコン+ミニシアター	ミニシアターのみ
300館以上	32	6%	32	0	0
150-299館	18	4%	16	2	0
70-149館	42	8%	17	23	2
50-69館	33	6%	3	20	10
30-49館	97	19%	4	44	49
10-29館	174	34%	25	27	122
9館以下	118	23%	17	9	77
以上小計	514	100%			
その他(都内1-2館での上映など)	128				
合計	642		114	125	260
日本映画+外国映画	1292				

想像される。9館以下の公開規模の作品は日本映画では194本34%、外国映画では118本23%を占めており、日本映画、外国映画とも、29館以下の公開作品が全体の半分以上を占めている。これらのほとんどがミニシアターで上映されている。シネコンは「大作」のみを上映するわけではないし、周辺にシネコンがないミニシアターや既存興行館は最新の大作とミニシアター系の作品を合わせてプログラムを組んでいる。メジャーな大作はシネコンで公開され、アート系・インディペンデント系の作品はミニシアターで公開されるという明確な線引きは、現在では無くなっている。→ fig. 09

公開作品の種類

日本映画の公開作品650本の内訳をみると、劇映画・アニメーションの新作が474本、ドキュメンタリー映画が71本、公演やライブ等のODSが32本、特集上映(短篇・若手・その他)が15企画73本となっている。前年を上回る71本のドキュメンタリー映画が劇場公開されたが、20館以上で公開されたのは20作品で、半分以上の作品が10館以下の公開で、ほとんどがミニシアターのみで上映されている。

アニメーションは、300館以上で公開される人気シリーズから10数館での小規模公開作品まで100本近く公開されたが、そのほとんどがシネコンで上映されている。日本映画の特集(名画座等での旧作の特集除く)15企画を確認したが、そのほとんどは若手監督の作品をまとめて上映するもので、1-3館での上映にとどまっており、全てミニシアターで上映されている。ODSは32本公開されている。「シネマ歌舞伎」、「ゲキ×シネ」、「熊川哲也 Kノバレエカンパニー」等のシリーズはシネマコンプレックスのみで上映され、イオンシネマ系列では「列車大行進」シリーズが上映されている。外国映画の公開作品514本の内訳は、劇映画・アニメーションの新作が346本、ドキュメンタリー映画55本、ODSが47本、旧作デジタルリマスター版のリバイバル公開が35本、特集上映が7企画31本で、以上の小計が514本。さらに、東京の1館(あるいは2、3館)のみで特集上映された作品が128本あり、合計642本となっている。今年も多くの旧作のデジタルリマスター版がリバイバル公開された。『ホフマン物語』(1952 | マイケル・パウエル)、『山猫』(1963 | ルキノ・ヴィスコンティ)、『去年マリエンバードで』(1961 | アラン・レネ)といったいわゆるク

ラシック名画に加え、『小さな恋のメロディ』(1971 | ワリズ・フセイン)、『ラスト・タンゴ・イン・パリ』(1972 | ベルナルド・ベルトルッチ)、『サスベリア』(1977 | ダリオ・アルジェント)、『ゾンビ』(1978 | ジョージ・A・ロメロ)、『さらば青春の光』(1979 | フランク・ロッダム)等の70年代のヒット作、80-90年代にミニシアターで公開されたフィリップ・ガレル(『ギターはもう聞こえない』等)やチェン・ユージュン(『熱帯魚』『ラブ・ゴー・ゴー』)の作品、『マイ・ビューティフル・ランドレット』(1985 | スティーヴン・フリーアーズ)や『サタンタンゴ』(1994 | タル・ペーラ)といった作品が公開され、映画ファンを集めている。そのほとんどがミニシアター5-30館程度での公開である。また、ヤスミン・アフマド、クリス・マルケル、アニエス・ヴァルダ、ルネ・クレール、ハル・ハートリー、イ・チャンドン等の監督の小規模特集が配給され、ミニシアター(名画座、自主上映、シネマテークを含む)で5-20館程度で公開された。外国映画のODSは、「METライブビューイング」、「英国ロイヤル・オペラ・ハウス」、「ナショナル・シアター・ライヴ」、「カラヤン・シネマ・クラシック」等のシリーズがシネマコンプレックスを中心に公開されている。→ fig. 10

fig.10
2019年に公開された映画の分類

日本映画	2019	2018
一般映画新作(アニメーション)	94	442
一般映画新作(劇映画)	380	
ドキュメンタリー	71	59
ODS	32	23
特集上映(短篇・若手・その他)	73	82
日本映画合計	650	606

外国映画	2019	2018
一般映画新作(アニメーション)	16	332
一般映画新作(劇映画)	330	
ドキュメンタリー	55	45
ODS	47	46
旧作デジタルリマスター版	35	29
特集上映(旧作デジタルリバイバル)7企画	31	52
以上小計	514	504
1館(あるいは2、3館)のみでの上映	128	139
外国映画合計	642	643

日本映画+外国映画	1292	1249
-----------	------	------

fig. 11

2019年興行収入

10億円以上作品

[日本映画]

「日本映画産業統計」参照
(日本映画製作者連盟)

順位	公開月	作品名	興収(億円)	配給会社
1	7月	天気の子	140.6	東宝
2	4月	名探偵コナン 紺青の拳(ファスト)	93.7	東宝
3	4月	キングダム	57.3	東宝/SPE
4	8月	劇場版「ONE PIECE STAMPEDE」	55.5	東映
5	3月	映画ドラえもん のび太の月面探査記	50.2	東宝
6	1月	マスカレード・ホテル	46.4	東宝
7	18/12月	ドラゴンボール 超ブローラー	40.0	東映
8	2月	翔んで埼玉	37.6	東映
9	9月	記憶にございません!	36.4	東宝
10	7月	ミュウツーの逆襲 EVOLUTION	29.8	東宝
11	5月	コンフィデンスマンJP	29.7	東宝
12	8月	劇場版おっさんずラブ ～LOVE or DEAD～	26.5	東宝
13	9月	かぐや様は告らせたい～天才たちの恋愛頭脳戦～	22.4	東宝
14	2月	七つの会議	21.6	東宝
15	4月	映画クレヨンしんちゃん 新婚旅行ハリケーン ～失われたひろし～	20.8	東宝
16	7月	アルキメデスの大戦	19.3	東宝
17	6月	劇場版 うたの☆プリンスさまっ♪ マジLOVE キングダム	18.2	松竹
18	6月	ザ・ファブル	17.7	松竹
19	1月	劇場版 Fate/stay night [Heaven's Feel] II. lost butterfly	16.6	アニプレックス
20	18/12月	平成仮面ライダー20作記念 仮面ライダー平成ジェネレーションズ FOREVER	15.6	東映
21	1月	十二人の死にたい子どもたち	15.5	WB
22	2月	劇場版シティーハンター 新宿プライベート・アイズ	15.3	アニプレックス
23	5月	プロメア	15.0	東宝映像事業部
24	11月	映画 すみっこぐらし とびだす絵本とひみつのコ	14.5	アスミック・エース
25	8月	ドラゴンクエスト ユア・ストーリー	14.2	東宝
26	2月	フォルトゥナの瞳	13.7	東宝
27	9月	人間失格 太宰治と3人の女たち	13.2	松竹/アスミック・エース
28	1月	ラブライブ!サンシャイン!! The School Idol Movie Over the Rainbow	13.0	松竹
29	18/12月	映画 妖怪ウォッチ FOREVER FRIENDS	12.5	東宝
29	10月	HiGH&LOW THE WORST	12.5	松竹
31	7月	Diner ダイナー	12.4	WB
32	7月	劇場版 仮面ライダージオーウ Over Quartzer / 騎士竜戦隊リュウソウジャー THE MOVIE タイムスリップ! 恐竜パニック!!	11.7	東映
33	5月	空母いぶき	11.6	キノフィルムズ
34	18/12月	こんな夜更けにバナナかよ 愛しき実話	11.4	松竹
35	2月	雪の華	11.2	WB
36	8月	引越し大名!	11.1	松竹
37	3月	君は月夜に光り輝く	11.0	東宝
37	11月	決算! 忠臣蔵	11.0	松竹
39	2月	コードギアス 復活のルルーシュ	10.6	ショウゲート
40	10月	最高の人生の見つけ方	10.5	WB
		合計	1047.8	

fig. 12

2019年興行収入

10億円以上作品

[外国映画]

「日本映画産業統計」参照
(日本映画製作者連盟)

順位	公開月	作品名	興収(億円)	配給会社
1	11月	アナと雪の女王2	127.9	WDS
2	6月	アラジン	121.6	WDS
3	7月	トイ・ストーリー 4	100.9	WDS
4	8月	ライオン・キング	66.7	WDS
5	18/11月	ファンタスティック・ビーストと黒い魔法使いの誕生	65.7	WB
6	4月	アベンジャーズ/エンドゲーム	61.3	WDS
7	10月	ジョーカー	50.6	WB
8	18/12月	シュガー・ラッシュ:オンライン	38.6	WDS
9	6月	スパイダーマン: ファーム・フロム・ホーム	30.6	SPE
9	8月	ワイルド・スピード/スーパーコンボ	30.6	東宝東和
11	5月	名探偵ピカチュウ	30.1	東宝
12	5月	ゴジラ キング・オブ・モンスターズ	28.4	東宝
13	11月	ターミネーター: ニュー・フェイト	23.5	WDS
14	7月	ベット2	21.6	東宝東和
15	3月	グリーンブック	21.5	GAGA
16	3月	キャプテン・マーベル	20.4	WDS
17	11月	IT/イット THE END “それ”が見えたら、終わり。	18.4	WB
18	2月	アクアマン	16.4	WB
18	18/12月	アリー/スター誕生	15.1	WB
20	10月	マレフィセント2	14	WDS
21	18/12月	グリンチ	13.2	東宝東和
22	2月	メリー・ポピンズ リターンズ	11.8	WDS
22	8月	ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド	11.8	SPE
24	6月	メン・イン・ブラック: インターナショナル	10.3	SPE
25	3月	ダンボ	10	WDS
		合計	961.0	

興行収入10億円を越える映画/
10億円以下の映画

2019年、興行収入が10億円を越える映画は邦洋合わせて65本(2018年は54本)で、本数では全公開本数1278本の5.1%を占めている。興行収入では、日本映画約1047.8億円、洋画961億円で合計2009億円となり、全興行収入の76.9%を占める。この割合は2018年よりも約7%増えている。1年間に公開される作品のうち、65本(5.1%)の映画が、全興収の76.9%を占め、それ以外の1213本(94.9%)の映画が23.1%(602億円)を分け合うという状況には10年間で大きな変化は見られないが、2019年は10億円を越える作品の割合が例年以上に高い数値を示している。

→ fig. 11-15

fig. 13

2019年興行収入上位20作品

「日本映画産業統計」(日本映画製作者連盟)参照

順位	公開月	作品名	興収(億円)	配給会社
1	7月	天気の子	140.6	東宝
2	11月	アナと雪の女王2	127.9	WDS
3	6月	アラジン	121.6	WDS
4	7月	トイ・ストーリー4	100.9	WDS
5	4月	名探偵コナン 紺青の拳(ファスト)	93.7	東宝
6	8月	ライオン・キング	66.7	WDS
7	18/11月	ファンタスティック・ビーストと黒い魔法使いの誕生	65.7	WB
8	4月	アベンジャーズ/エンドゲーム	61.3	WDS
9	4月	キングダム	57.3	東宝/SPE
10	8月	劇場版「ONE PIECE STAMPEDE」	55.5	東映
11	10月	ジョーカー	50.6	WB
12	3月	映画ドラえもん のび太の月面探査記	50.2	東宝
13	1月	マスカレード・ホテル	46.4	東宝
14	18/12月	ドラゴンボール超 ブロリー	40	東映
15	18/12月	シュガー・ラッシュ:オンライン	38.6	WDS
16	2月	翔んで埼玉	37.6	東映
17	9月	記憶にございません!	36.4	東宝
18	6月	スナイダーマン:ファー・フロム・ホーム	30.6	SPE
18	8月	ワイルド・スピード/スーパーコンボ	30.6	東宝東和
20	5月	名探偵ピカチュウ	30.1	東宝
合計			1,282.3	

fig. 14

興行収入10億円以上の映画/
興行収入10億円未満の映画
(2019)

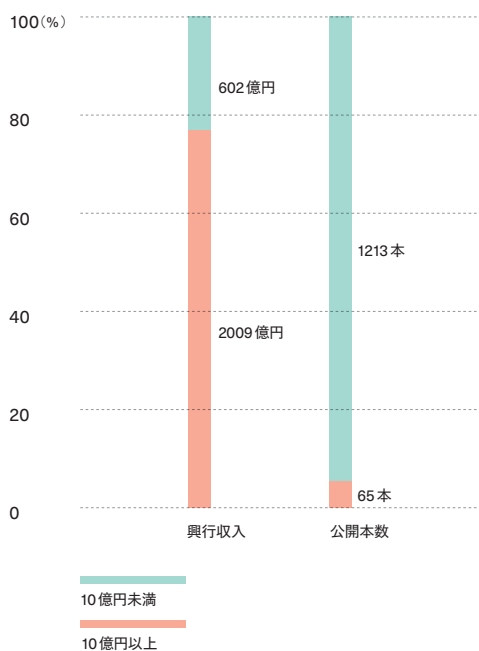


fig. 15

興行収入10億円以上の映画/
興行収入10億円未満の映画
(2010-2019)

	全体		10億円以上		10億円未満	
	興収	割合	興収	割合	興収	割合
2010	2,207	71.5%	1,577	71.5%	630	28.5%
2011	1,812	72.4%	1,313	72.4%	499	27.6%
2012	1,952	71.3%	1,391	71.3%	561	28.7%
2013	1,942	71.0%	1,379	71.0%	563	29.0%
2014	2,070	68.2%	1,411	68.2%	659	31.8%
2015	2,171	73.5%	1,595	73.5%	576	26.5%
2016	2,355	74.9%	1,763	74.9%	592	25.1%
2017	2,286	70.8%	1,618	70.8%	667	29.2%
2018	2,225	70.2%	1,563	70.2%	662	29.8%
2019	2,611	76.9%	2,009	76.9%	602	23.1%

公開本数

	全体		10億円以上		10億円未満	
	本数	割合	本数	割合	本数	割合
2010	716	6.7%	48	6.7%	668	93.3%
2011	799	6.8%	54	6.8%	745	93.2%
2012	983	6.0%	59	6.0%	924	94.0%
2013	1117	5.0%	56	5.0%	1061	95.0%
2014	1184	4.1%	49	4.1%	1135	95.9%
2015	1136	5.4%	61	5.4%	1075	94.6%
2016	1149	5.3%	61	5.3%	1088	94.7%
2017	1187	5.2%	62	5.2%	1125	94.8%
2018	1192	4.5%	54	4.5%	1138	95.5%
2019	1278	5.1%	65	5.1%	1213	94.9%

「日本映画産業統計」(日本映画製作者連盟)参照